

名 称	小菅人を育む会
所 在 地	〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4698
連 絡 先	TEL : 0428-87-0111 FAX : 0428-87-0933

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 小菅村 933人【平成20年2月末日現在】

本村は山梨県の東北端に位置し、周囲を1,300～2,000m級の高い山々に囲まれている。東西に14km、南北に7km、総面積が52.65km²で、その95%を山林が占めている、小さいながらも自然豊かな山村である。北を丹波山村、西を甲州市、南を大月市と上野原市、東を東京都の奥多摩町にそれぞれ隣接しているが、県内の3市村を結ぶ道路はいずれも大小の峠があり公共の交通機関は存在しない。村の中央を大菩薩嶺に源を発する多摩川の源流「小菅川」が流れており、川の流れと同様に住民の生活圏は東京都と深く関わりを持つ。

本村には二つの神楽と獅子舞のほか、国の重要文化財に指定されている長作観音堂があり、古き文化が今も語り継がれている。近年では若年層の流出による過疎化とそれに伴う少子高齢化が進んでいるが、豊かな自然や文化を生かし、日々成長していく子どもたちと大人が関わりを持ち続けることで、老若男女がそれぞれの個性を尊重しながら共に育んでいける小菅人づくりを目指している。

事業の名称、活動概要

名称 小菅人を育む会事業

本会発足当時は三部会制で活動を開始したが、現在では自然体験を中心に活動する第一部会と、文化芸術に関する体験を中心に活動する第二部会の二部会制で子どもたちと共に事業の展開を行っている。

立地的にも限られた教育環境において「前向きに取り組む(ないものねだりをしない)」、「ひと事にしない」、「実践してみる」の三つの柱を基本姿勢に持ち、部会ごとに委員の自由な発想のもと子どもたちに新たな発見と感動を与えられるような体験活動を実施。事業を通じ、家庭や地域における教育力の向上も目指している。

事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

平成14年からの学校週5日制が始まる際、学習指導要領の改定により教科内容が当時の3割くらい削減されるなど、国の教育方針が大幅に変わることが予想できた。本村においては学習塾や児童館もなく、近隣の市町村までの交通の便を含め決して恵まれた教育環境といえず、子どもたちの学力低下や週末の時間の過ごし方などを心配する声があった。この制度改革を逆にとり、子どもたちを磨き輝かせていくための良い機会と捉え、家庭、地域、学校が連携して積極的にその受け皿づくりを考え、実践していくことを目的に本会の原点となる活動が始まった。

子どもたちに生きる力を付けていくため、豊かな自然や経験豊富な人材、小さい村だからこそ小回りがきくという利点を生かし、様々な取り組みを考えてきた。事業実施に当たっては、大人がまず知恵を出し合い、出されたアイデアを実践し、反省していくことを繰り返す中で、子どもたちを村の宝として磨き輝かせていくための取り組みを行っている。特にPTA、育成会、村民会議等の各種団体との連携により、活動を村全体に周知し、多くの協力を得られるよう努めている。

事業の内容

① 事前準備として行った取組（企画段階）

会の発足当時、中心となる委員の選考について特に重視された。これには、行政が主体となるのではなく補助的な役割を担うことで、生きた体験プログラム作りにつなげるという目的があり、地域、年齢、男女比等のバランス調整が必要不可欠であった。また、学校教員を世話人という形で迎え入れることで、学校間との連携も考えた。

会の活動や目的についての全体的な周知を村の広報誌や村民会議の場で行うことで、広く地域住民の参加や協力を促した。

② 活動の展開内容（活動段階）

小菅人を育む会では大人の自由な発想のもと、実践、反省を繰り返し、その都度軌道修正を行いながら、村全体をフィールドに体験プログラムを行っている。

自然体験を中心とした第一部会活動では、豊かな自然の中で郷土の四季を満喫できる野外での体験を、文化芸術を中心とした第二部会活動では、昔ながらの文化体験や古くから伝わる伝承芸能や芸術活動に加え、幼児から大人までが一堂に参加できる異年齢間交流を目的とした活動も合わせて展開している。指導については、本会の委員や一般有志の住民が当たり、大人と子ども、地域間の絆をそれぞれ深められるよう工夫している。また、事業によっては保育所や学校との連携でスクールバスの利用や児童、生徒への参加の募集、学校施設の利用など、柔軟に対応している。

近年行った事業の一部は次のとおり。

○ 春を食べよう

山野草の専門家を講師に、食べられる植物とそうでないものを学びながら新緑の山の中を散策。食べられるものについては採取し、自然の中で天ぷらにして食した。散策の途中では、樹木の生態についても学んだ。

○ 川で遊ぼう

小菅川の上流を会場に魚の掴み取りや、水中観察、昔の道具（ブツテ）の体験などを行った。大人と子どもが協力し合い、竹を切って流しそうめんを行った。



○ 秋を歩こう

秋の山を散策しながら、自分で拾った木の実を持ち帰り、鉢に植えてどんな芽がでるか自分の目で確認させる。途中で10分間の瞑想時間を取り、森の音と匂いを全員が体験した。きのこ汁やうどんを作って匂いの味覚も楽しんだ。



○ 足あとウォッチング

冬山を散策しながら、雪の上の足跡から山に生息する動物の生態を学ぶ。樹木に触れて感覚で覚える木の肌ウォッチングも合わせて実施。地元猟友会から、イノシシ鍋などの差し入れもあった。



○ きこり体験

大きな松を切り倒す場面を子どもたちに見せ、倒れる瞬間の迫力を体験させる。その後ナラの木をのこぎりで切り、一人1本ずつしいたけ栽培用の「ほだ木」作りを行う。



○ ナイトウォッチング（星空観察会）

大学生など星空に詳しい若者に指導を仰ぎながら、夏と冬の星空を天体望遠鏡で観察し、星にまつわる話を学んだ。夏は現地までの移動中に行った胆試しが好評であった。

○ 祭典練習見学会

村に伝わる三つの地区の伝承芸能がそれぞれの祭典で奉納される。この祭典の練習会の際に、他地区の子どもたちを集め、練習の見学や実際に神楽や獅子舞を体験させる。自分の住む地区以外の伝承芸能に触れさせる良い機会となった。



○ 園児と遊ぼう

保育所との連携により主に土曜日を
利用した事業により異年齢間交流による相互のきずなを深める。
事業内容はその都度異なるが、ハイキングや森の中での遊び、昔ながらの餅つき大会や
はり絵づくりなど、ジャンルを問わない。



③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

事前準備の段階より会の委員構成についてバランス調整に重点を置き、村民会議や育成会連絡協議会の会議などを活用し、家庭、地域、学校がお互いに尊重し合い、連携が取れるように情報交換の場を大切にしたい。世話人という形で小中学校の教員が活躍することで、学校との連携にも力を入れている。

体験活動のフィールドを村内の様々な地区や場所に設定することで、子ども同士がお互いに住む地域の良さを認め合える傾向が出てきた。同様に大人たちもそれぞれが持つ得意分野や、自分が住む地域において指導者となることで、地域間における再発見とともに連携にもつながった。

活動においてボランティア的な観点から、同じ目的のもと協力し合える関係を保つことができている。物事に参加する際、身銭を切るという考え方も大切であると認識し、必要最低限分の負担金の徴収などを行いながら今後においても事業を継続する。

事業の成果と今後の課題

地域住民や学校から事業や活動に対する理解が得られたことにより、全体の反省の中で大人も身近なことながら子どもたちと一緒に学べた（お互いに育め合えた）という感想が多くあった。これは、日常あまり気にならないようなことも事業を通じて新たな発見として再確認できたことが伺える。さらには、異年齢間交流の場を作り、大人と子どもとのきずなを深めることにもつながった。

本村においては、少子高齢化が今以上に進むことは確実であり、事業規模の縮小は避けることができない状況にある。また、子どもの数の減少により実施が困難となるプログラムも出てくると思われる。日々成長し続ける子どもたちのために何ができるのか、家庭、地域、学校が更なる連携を取りながら慎重に考え、いかに実践に移していけるかが今後の課題となる。

理想的な小菅人、「公德心の持てる人」、「思いやりのある人」、「自立心のある人」、「互いに個性を認め合える人」、「小菅村に誇りをもてる人」を育てていけるよう努めていきたい。

執筆者職・氏名：小菅村教育委員会 社会教育担当主任 守重 公英

コーディネーターからの一言コメント

自然体験と文化芸術に関する体験を二本の柱にし、PTA、育成会、村民会議と連携で、子どもの育みに取り組んでいる。特に、学校に「世話人」の教員を置いて地域と密に繋いでいる点参考になる。

(中根 惇子)